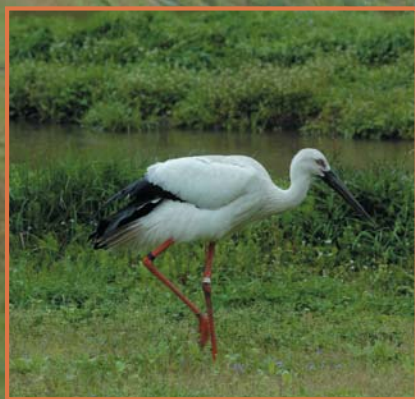


地域の底力 豊岡市



兵庫県豊岡市祥雲寺

コウノトリが 大空を舞う町・ 豊岡市を訪ねて

いったん絶滅してしまった特別天然記念物コウノトリ。
そのコウノトリをよみがえらせ、昔のように安全な環境を取り戻そうとした人々がいる。
科学的な分析と地域の力を結集した地道な取り組み。
それはコウノトリを再び大空に呼び戻すと共に、
人々が安心して暮らせる自然もまた自分たちの手に取り戻す道程だった。

取材・文 千葉 望 写真 栗原克己

1999年にオープンしたコウノトリの郷公園。165ヘクタールもの広大な土地に、コウノトリを保護・増殖して野生復帰させるためのさまざまな施設がある。ふと目をやると研究棟の屋根の上に放鳥されたコウノトリが羽を休めていた。

豊岡の空を自由に羽ばたくコウノトリ。大きな翼を広げたその姿は実に優雅で美しい。



コウノトリの 出迎えを受けて

伊丹空港からコウノトリ但馬空港に向かったプロペラ機は、折からの雨に機体をたたかれながらも、少しずつ高度を下げていった。あたりの低山は新緑に包まれ、ところどころに濃いピンク色が見える。近づくにつれ、それがヤマツツジだとわかった。コウノトリの里はすっかり春を

迎えているのだった。

空港からさっそく豊岡市内にある「コウノトリの郷公園」をめざした。ここには「コウノトリ文化館」があり、館長でコウノトリの復活に尽力してきた松島興治郎氏が取材陣を待っていた。

豊岡市といえば、平成十六（二〇〇四）年十月の水害を忘れるわけにはいかない。普段は広く穏やかに見える円山川が台風による大雨によって氾濫し、市内は水浸しになった。豊岡市では死者一人、負傷者四六人、住宅被災者は約一万八〇〇〇人と、市民の約四割が被災したほどだった。この台風では、京都府舞

鶴市の国道で、豊岡市職員OBが乗った観光バスが水没し、取り残された乗客が屋根に上って一昼夜、互いに励ましあって救助を待っていた姿も大きく報じられた。

タクシーで向かう道々、運転手氏が豊岡市の自然の厳しさについて話してくれた。古くからある家はきちんと石を組んでその上に建ててあるが、最近大きな水害がなかったため、新しい家々は川のすぐそばの平地に建てていたから被害が大きくなったのだという。教訓を忘れた人間に、いつか自然は鉄槌を下すのだ、と。話を聞きながら目を車窓の外に向けると、田の中に

あたりの電信柱よりも頭一つ高い鉄柱が見えた。コウノトリの人工巣塔である。雨の中、コウノトリの姿は見えなかった。

公園に向かっていて、ひとつづつ気づいたことがある。家々は特に贅沢な造りでもなく、普通の住宅が続いていたが、どの家も手入れが行き届き、庭木や鉢がきれいに春の花を咲かせているのだ。道路わきには並べて植えられた水仙の群れが、白く可憐な姿を見せていた。豊岡の人々は、故郷を大切に思っ手入れをしているように思えた。これも「コウノトリ効果」なのだろうか。遠来の客が増えてくると、どの地域も自分たちの土地を綺麗にしようと心がけるものだから。

コウノトリ文化館に着いたとき、頭の上を悠然と飛ぶ影があった。コウノトリだ！ テレビで見っていたよりも、ずっと大きく、優雅である。やがてそのコウノトリは文化館の屋根に止まって、ぴたりと動かなくなった。まるで取材陣を迎えるためにやってきたかのようだった。



まつしま・こうじろう●1941年豊岡市生まれ。1960年豊岡高校卒業後、かばん製造会社勤務を経て、65年からコウノトリの専属飼育員として保護増殖に尽力。99年に県立コウノトリの郷飼育長に就任。コウノトリの絶滅と戦い、人工飼育で復活させ、野生復帰に取り組んだ長年の活動が評価され、2001年神戸新聞平和賞を受賞。現在は豊岡市立コウノトリ文化館館長を務める。

山林と湿地からなるコウノトリの郷公園内には、繁殖用や飛翔訓練用、野生化訓練用など目的にあわせた17基ものケージがあり、公開ゾーンのケージには、コウノトリを見にたくさんの人が訪れる。



コウノトリ絶滅の経緯

にこやかに迎えてくれた松島館長は、豊岡で生まれ、豊岡を離れたことがないという土地っ子である。子供のころから動物が大好きで、さまざまな動物を飼いつけてきた。豊岡高校時代には生物部員として、天然コウノトリのヒナの孵化から巣立ちまでを夢中になって観察した経験の持ち主である。

「私が子供のころは、みんな川で泳いでいたものです。泳がなくなつたのは昭和四十年ぐらいからかな。学校にプールができたこと、それから川が汚くなり、環境が悪くなったことが原因でしょうね」

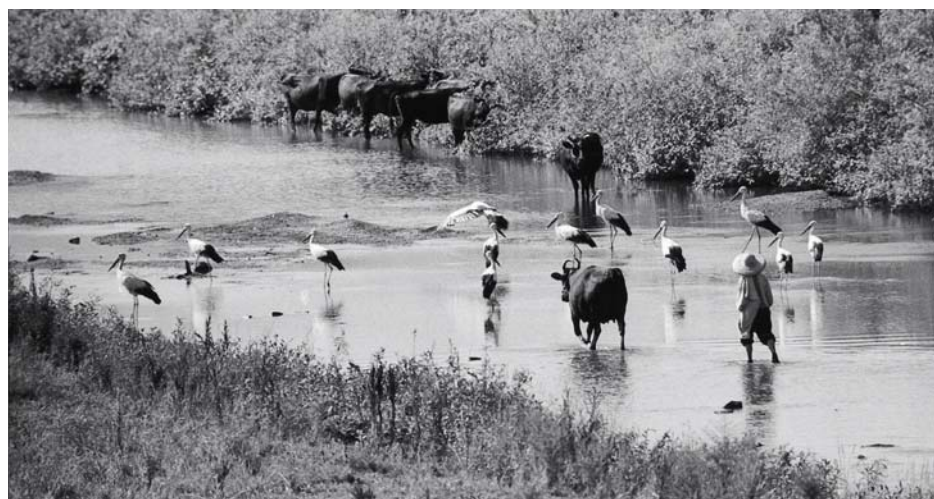
そう言いながら松島館長は、豊岡の古い写真集を見せてくれた。その中に、川の浅瀬を行く農村の女性と農耕牛、そしてたくさんのコウノトリが写った一枚があった。なんと美しく、懐かしい光景だろうか。それは生き物と人が自然の中で一体化した、輝くような情景である。こ

れほどコウノトリがいた時代があったのだ。それも、遠い昔ではなく。松島館長が話す。

「昭和三十年代には電気洗濯機が一気に普及してきました。その生活排水が川に流れ込む。また農地に散布される農薬や化学肥料もまた、水辺と水辺の生物をおびやかしていったんでしょ。うな。またこのあたりは三十年代から四十年代にかけて、プロイラーの一大産地だったことがあります。そこからの農業排水もひどかったですね。農薬も排水も、全然気かけない時代が長く続きました」

農薬が一気に行き渡ったのも無理はない。豊岡周辺は高温多湿で気候変動が激しく、低温の危険もある。稲作で一番恐れられるイモチ病が発生しやすい条件が整っていた。昔はただ疫病退散のお札を田に掲げていた時代もあったというが、水銀製剤のおかげですっかり危険は遠ざかった。だが、その陰で恐ろしいことが進行していた。

「農薬だけではありません。コウノトリは大きな松の木に巣を



かけるんですが、戦時中松根油をとるためにどんどん木が切られてしまった。植樹したって大きく育つには時間がかかる。とにかくコウノトリを取り巻く環境全体が悪化していたんです」

そのあたりの詳しい事情を語ってくれたのは、コウノトリ文化館から歩いて一五分と離れていないところで稲作などの農業

「コウノトリ育む農法」によって作られたお米は、「ひょうご安心ブランド」として兵庫県の認定を受け、安全安心なお米は消費者の心をつかみ、高値でも売れている。



「コウノトリ育む農法」で米作りに取り組むコウノトリの郷営農組合前組合長の暇悦喜氏。祥雲寺地区と周辺の農家23戸で2002年に発足した「コウノトリの郷営農組合」が率先して取り組み、導入農家が次第に増えていった。

を営む暇悦喜さんである。

「あるとき、何百という魚が死んで腹を上にしたまま浮かんでいましたよ。水銀中毒です。タニシも死ぬ、ドジョウも死ぬ、カエルも死ぬ、蛇も死ぬ。そのうちカラスも死んだ。そしてコウノトリがいなくなった。餌がなくなるんだもの、死ぬのは当たり前だ。農薬がよくないとい

うことはうすうす分かっていただけだね。農薬を散布した日は酒を飲むなんて連絡が来たもんですよ。血行が悪くなって、毒がまわるからだろうね」
コウノトリが減っていく状況に対し、まわりも手をこまねいていたわけではない。昭和三十一年（一九五六）年にはコウノトリが特別天然記念物に指定されたこともあって、保護活動は活発に行われてきた。昭和三十七年、「ドジョウ飢饉」といわれるほどドジョウが減った年は、コ



失敗の連続だった人工飼育

昭和四十（一九六五）年、ひとつがいのコウノトリを捕獲。このときコウノトリを抱き取ったのは松島館長自身であった。高校を卒業して豊岡市の地場産業であるかばん製造の仕事に就いていた松島館長だが、すでに仕事そっちのけでコウノトリの保護活動に夢だったため、五月には人工飼育場の正式な職員

ウノトリの餌にしてもらおうと、「ドジョウ一匹運動」が展開された。だが、このころにはもう、コウノトリは一一羽に激減していた。国と県は人工飼育、人工孵化に踏み出さざるを得なかった。

になった。

「最初はみんな、ものすごい熱気でコウノトリに関わったんですよ。だけどだんだん数は減ってくる、卵が生まれても孵化しない。ニュースはどんどん暗くなる。こうなると状況が変わるんですね。だけどコウノトリの問題は人間の問題でもあるわけですよ。水俣の水銀中毒の問題も広く知れ渡っていたし、死んでしまった野生のコウノトリから高濃度の化学物質が見つかったりすると、これはなんとかしなきゃいけないとみんなが思う。自分だけの問題じゃないから」
せっかく卵が生まれても、多くが無精卵だった。オスが受精させる能力を失っていたのだ。有精卵も孵化しなかった。その卵を割ってみると、中では真っ黒になったヒナが冷たくなっていった。コウノトリは人間に無言で警告を発していたように思えた。やがて奮闘むなしく日本原産のコウノトリは絶滅してしまふ。そのときの松島さんたちの気持ちを見ると、言葉もなかった。

地域の協力で 自然が回復

結局、昭和六十（一九八五）年に兵庫県が姉妹提携している旧ソ連のハバロフスク地方から、六羽の幼鳥が贈られることになった。この貴重な鳥をなんとしても増やさなければならぬ。この六羽から二組の夫婦が誕生した。コウノトリは気難しく、つがいを作るのがなかなか難しいのだという。

「幸い、そういう名人がいましたね。つがいにしたいオスとメスを同じ檻に入れておいて、隣に気の荒いオスを入れる。そのオスがメスにちょっかいを出す

「コウノトリ育む農法」を行う祥雲寺の田んぼの中に、段階的に野生環境に馴らしていくための収容ケージが作られている（下）。コウノトリの野生化のためには周辺の環境整備が重要となる。田んぼと水路をつなぐ「魚道」をつくり、餌となる魚や水生生物がとどまる豊かな水辺を再生した（左）。



と、自然と一緒にいるオスが守ろうとして、だんだんうまくいくというわけです。コウノトリにもやたらともてるとか、嫌われるのがいましてね。振る舞いの粗暴なやつはどうしても嫌がられますね（笑）。ま、一度夫婦になると一夫一婦ですつとむつまじく暮らすんですが」

そのカップルから初めてのヒナが孵化したのは平成元（一九八九）年のことだった。飼育下繁殖を始めて実に二四年がたっ



ていたというから、豊岡の人たちの我慢強さに感心させられる。卵から産毛に覆われた小さな姿が現れたときの感動は、どれほど大きかったことだろうか。

有精卵が誕生したからすぐにヒナが孵るわけではなく、松島さんたちのさまざまな試みは続いていた。生まれた卵と擬卵をとりかえ、親鳥には擬卵を温めてもらう。交換した卵は孵卵器を調整することによって、孵化の時期を遅らせた。気温が低く降雪もある豊岡の冬をうまく乗り越えるためである。一方環境調査も行つて、豊岡のその時点での自然の回復度を計算して、何羽であれば生きていけるかはじきだした。餌付けに頼らず、自然の中でコウノトリが生きていく準備である。

いったんは関心が遠ざかっていった市民の中でも、卵が生まれた、ヒナが誕生したとなると俄然熱気が生まれた。なんといつでもコウノトリはかつて特別天然記念物として市民の誇りだったし、宝だったのだ。そういう経緯を知らなくても、悠然と大

空を舞うコウノトリの姿を一目見れば、美しさに心奪われるにちがいない。

人工飼育が進む一方で、暇さんたち農家の人々も、環境保全の意識を高めていた。

「思い返せば、しばらくは危機感もなかったですよ。『なんだかコウノトリがおらんようになってたな。少なくなったな』と言ううちにああいうことになって。で、環境創造型農業に取り組んだの





コウノトリの郷公園の入り口にあるコウノトリポストは子供たちの人気者。このポストに投函すると、特別にコウノトリマークが入った消印がつく。



は平成の初めです。農薬の毒性は徐々に低くはなっていましたけれど、無農薬の農業に取り組もうというようなことはね。やがてアイガモ農法が入ってきました。

した。僕は一番多いときで七反やったかな」

アイガモ農法とは除草剤を使わず、雑草や害虫をアイガモに食べてもらうことによって無農薬栽培を実現する農法である。アイガモは大きくなったら食肉として出荷する。いわば一石二鳥の農法だった。だが、話を聞いてみるとそれほどいいことばかりでもないらしい。

「なんたって手間がかかる。アイガモ用の野菜作りからせんらん。野菜をやらんと稲を食べってしまうから。かといって餌をやりすぎると、今度は働かない(笑)。アイガモは稲の成長に合わせて九州からヒナを買うんです。あんまり大きくなって元気がよくなると、稲をつぶしてしまふんですよ。肉も常時同じような分量を出荷できるわけではないので、商売としては難しいんだねえ」

だが、アイガモ農法で穫れた米は高く売れる。環境も確実に変化していった。田んぼに出る農家の人たちが、一番その変化を感じ取っていたかもしれない。

畝の草刈りをするとき、すっきり姿を見かけなくなっていた生き物たちが再び旺盛な生命力を取り戻しているのを目の当たりにした。おびただしいカエル、ドジョウ、タニシ、蛇……懐かしい生き物たちがよみがえっていたのだった。

「僕らも、コウノトリのために始めたわけじゃない。それじゃいくら掛け声が勇ましくても、続かんだろうと思ってるね。やっぱり子供や孫の世代に汚れた環境を残したくないという気持ちですよ。それが結果的に、コウノトリやほかの生き物たちが戻ってくることもつながったということだろうね」

畠さんが所属する集落は二三十戸。大きな規模ではない。委員も一二人ほど。そのメンバーが月一回以上の会議を開き、地域の文化や歴史について話し合った。特にコウノトリの郷公園ができて以来、一体となった地域づくりに取り組んできた。農地を守り、環境を守るのは結局自分たち自身であるという結論にたどり着いた。

コウノトリ放鳥の大きな意義

兼業農家を中心で忙しい日々、よく地域の人たちが協力したと思う。松島館長も、

「それだけ危機感が強かったということでしょう」

と話す。コウノトリという象



二〇〇七年七月三十一日、四十六年ぶりに人工巣塔から野生のコウノトリのヒナが巣立った瞬間(写真提供 豊岡市立コウノトリ文化館)。

コウノトリは見晴らしの良い松の木に巣をかける。伐採され松が少なくなった豊岡で、放鳥したコウノトリが電柱に巣をかけたため、人工巣塔を設置して誘導。作戦は成功し、昨年、野外の人工巣塔で初めてヒナが誕生したときは、豊岡で号外が出たという。今年も、人工巣塔で巣づくりをしたペアからヒナが孵り、コウノトリの郷公園の研究員が遠くから望遠カメラで観察を続けていた。



徴があったから、環境回復の重要性に対する気付きや取り組みが早かったし、住民の力も結集

できたのだろう。

やがて、コウノトリの人工繁殖から、野生に返す試みへと努力の方向が変化していく。コウノトリ文化館の庭にいるコウノトリは、保護のため羽を切られていて遠くまで飛べない。本当は再び豊岡の天空を舞う姿が見たいと誰もが願っていた。自然は回復してきた。放鳥しても暮らせるだけの環境は整った。

もっとも、育てたコウノトリを放したからといって、すぐ野生に返るわけではない。ここで



人とコウノトリが共生する風景が“当たり前”になる日まで、自然回復への弛まぬ努力が続く。

も、松島館長たちスタッフの努力があった。たまたま大陸から飛来した野生のコウノトリの生態を観察し、それを参考にして人工飼育していたコウノトリの飛翔訓練を二年かけて行なった。飛び方、餌のとり方、コウノトリ同士の社会形成訓練。地道な道程を一步一步進んでいったのだった。

平成十七（二〇〇五）年九月、ようやくコウノトリが豊岡の空を舞う日がやってきた。秋篠宮ご夫妻をお迎えし、五羽のコウ

ノトリが放鳥されたのである。当時小学三年生だった囃さんの孫も放鳥式に参加し、コウノトリの歌を歌って祝った。コウノトリの入った箱のテープがカットされ、次々に飛び立っていくさまは、ニュースでも大きく報道された。だがそのときは、豊岡の人たちのコウノトリにかけた思いや努力を知らなかった。なぜ大ニュースになるのだろうか

かと疑問に思わなかったわけではない。

だが、話を聞き、実際に豊岡の空を舞うコウノトリを見て、それがどれほど大きな意味を持っていたのかよくわかった。地域の力を結集してよみがえらせた自然。目にしみるような緑の中に、コウノトリの白が鮮やかに映える。これらは一度、豊岡の人々の手からすりぬけようとしていたものだ。

帰途、雨中の人工巣塔にコウノトリが戻っているのが見えた。目を凝らすと、小さなヒナが二羽、首を伸ばして餌をねだっている。豊岡が取り戻した、なんともいえず心温まる光景だった。